



## 退院後追跡調査から見えたもの ～訪問リハ利用による継続支援の傾向と今後の展望～

○徳原 和明（理学療法士）、和田 崇（理学療法士）

医療法人社団生和会 周南リハビリテーション病院 リハビリテーション科

### 【背景と目的】

先行研究で回りハ病棟から自宅退院した患者は環境の変化により ADL が低下しやすいという報告を散見する。生活立ち上げ期から調整期を見据えた支援が重要視されており、当院でも追跡調査や介護保険サービスへ繋げているが、訪問リハを利用した患者に好転した傾向が出たため報告する。

### 【対象】

2015年11月～2018年5月に当院回りハ病棟から自宅退院した111名、うち当院訪問リハを継続利用したのは23名。

### 【方法】

退院1週間後、3ヶ月後に電話連絡、1ヶ月後に自宅訪問を行い、訪問リハ利用者群と非利用者群で FIM 運動項目（以下 FIM-M）や介護保険サービス利用状況の変化を比較した。

### 【結果】

退院時FIM-Mと比較して非利用者群では、全体で11%（1週間）、9%（1ヶ月）、10%（3ヶ月）の低下を認めたが、利用者群ではFIM-Mの低下は生じなかった。サービスに関しては、利用者群で退院後早期から利用状況に変化を認めた。

### 【考察】

訪問リハ利用者群は、生活立ち上げ期から調整期で円滑な支援が行えたことで FIM-M 低下の防止と在宅生活で必要なサービスを退院後早期から再検討できた為と考えられる。近年では患者の家族構成や生活スタイル、土地柄、県民性等の影響もあり、通所介護を選択する家族が多い傾向にある。今回の結果より訪問リハでの継続支援の重要性が示唆されたが、現状を考慮するとケアマネージャーや地域支援と密な情報交換を徹底することで生活立ち上げ期の質を担保していきたい。